懐かしい声を聞いたような気がして目を開けたところで、スバルは、自分が眠っていたことに気が付いた。開ききらない瞼越しに空を見上げると、西の方角へ双子月が南の六角星に接近している。だいぶ、夜が深まっている証拠だ。

「ずいぶんよく寝てたな」

傍らで武器の手入れをしていたケントが、声を上げた。たき火を挟んで座る彼のさらにその先には、森が果てしなく続いている。虫の声すらも、ここに横臥したときと変わりはない。

「ああ。長い夢を見ていたみたいだ」

「妹さんのか」

答えなかった。ケントも、さしたる興味があって言っているわけではないだろう。スバルの双子の妹、ポーラ。十五年前に死んだ。

ふいに、虫の声がやんだ気がした。同時にケントの顔色が変わる。

「やつらだ」

低く押し殺したような声にスバルが起き上がると、ケントはすでに弓と槍を手にして立ち上がっていた。あわててスバルも、枕にしていた外套を羽織り、短剣を握りしめる。

風呂敷に乗せておいた砂をひっくり返してたき火を消す。しゅっ、という情けない音がしたとたん、あたりが真っ暗になった。

やつらは炎を恐れない。ならば、火を灯し続けても、自分たちの目が闇に慣れるのを遅らせるだけだ。

火を焚いている人間をわざわざ襲いにくるなど、普通の野生動物ならしないだろう。ということは、残された可能性は、追剥か、やつらかということになる。そして、この低く鈍い唸りを伴った気配は、人間ではありえなかった。

話をしている時間はなかった。唸り声は周りの木々の間、様々な方向から聞こえる。包囲されているのだ。では、何に？

すなわち、スバルたちがこれから殺そうとしている相手、神獣の尖兵たる、転生の獣と呼ばれるものたち。ここはやつらの巣の近くだ。

「殺れるのか？」

ケントは矢をつがえながら、スバルの方を見ずに言った。押し殺したような、小さい声だった。

そのとき、暗がりから何かが動くのがわかった。目が慣れておらずよく見えなかったが、転生の獣であることは、間違いなかった。

対応が遅れた。スバルは身体を翻そうとしたが、間に合わなかった。だが、獣の突進よりも先に、スバルは体勢を崩した。ケントが、彼を突き飛ばしたのだ。

地面が、血に濡れるのが見えた。ケントの腹が、獣の一撃を受けて真っ赤に染まっているのが見えた。

「大丈夫か？」

ケントが言った。突っ込んできた獣がまた暗がりへ消えていったのを確認して、スバルは片ひざをつくケントに駆け寄った。

「馬鹿、こっちのセリフだ。すぐに止血を」

「見た目ほどじゃない。それより次が来る」

スバルはあらためてあたりをうかがった。すでに、周りを包囲されているのを感じる。突破口らしき部分は一カ所あるが、おそらくそちらには伏兵がいるだろう。これまでやりあった何度かの経験で、やつらの思考はある程度、スバルにも読める。

「ケント。この数だ、全部やるのは難しかろう。お前は逃げろ」

スバルは彼に戦ってほしくなかった。今ならまだ引き返せる。ここまで来てくれれば、あとは自分一人で行くべきだ。この森に入る前に何度もそう説得した。だから、ケントの答えはわかっていた。

「馬鹿言うな。なんのためにここまで来た？」

「死ぬなよ」

その言葉が届いたかはわからなかった。ケントの気配は、すでにスバルの知覚できる範囲から逸脱していた。手負いとは思えない敏捷さだ。おそらく背後の木によじ登っているのだろう。獣と相対するために編み出した、ケントの戦法だ。

スバルはあえて伏兵のいる方へと走り込んだ。ケントは手負いだ。獣から遠ざける必要がある。大きく動いて、スバルは獣の注意を自分にひきつけようと思った。

刹那飛び込んできた影にあてずっぽうで短剣を突き立てる。かすりもしなかったが、相手の軌道をそらす目的は達せられたらしいのは、地の踏まれる音でわかる。同時に月明かりに慣れた目が、襲撃者の影を捉えていた。

蹄の食い込んだ地面に屹立する四肢に支えられた、紡錘状の体躯。深くはない毛に、醜い大きな鼻がまるで獣自身を象

徴するようにあしらわれている。その眼光から獣の感情を読み取ることはできなかったが、まっすぐとスバルに注がれているのはわかる。

転生の獣。それは、死を象徴する、忌むべき存在。いや、スバル以外にとっては、それは信仰の対象ですらある。

スバルはぬかるんだ地面を踏み込みかけて、やめた。その先にいくつもの目がきらめいたのを見たからだ。今飛び込んだところで、目線の先の一頭を仕留めても、囲まれるだけだ。

だから、差し出した足でバックステップするように後ろに飛びのいて、振り向きざま、背後から突進してきた獣を逆袈裟に薙いだ。

ぐぎゅうん、という切なげな声を漏らしながら、着地に失敗した獣がぬかるみの中に突っ込み、横たわったまま滑る。その姿が視界の端に入ったときには、スバルは走り出していた。

追跡の気配を感じた。森の中で走ることには多少自信はあったが、獣相手に保てるほどのものではない。木々の間をくぐりながら、適宜左右に進路を変えながら走る。しかけたいのはやまやまだったが、数の上では不利だ。せめて地の利を得られる場所で戦わなければならない。

だが今スバルの心の中は、そういった打算的な生存への戦略よりも、興奮が支配していた。それは命のやりとりに身をやつすことによる作用以上のものであることを、彼は知っていた。

やれる。やれるぞ。転生の獣を殺すことができる。スバルは握った短剣をじっと見つめた。やつらの命を奪うごとに、これから自分のなそうとしていることが、目に見えて確かに可能だと実感させられていった。

これまでスバルのような無謀な者が何度も、獣狩りを試みたが、誰もそれを成し得なかった。霊的に守護された獣は、倒すどころか、傷を負わせることすらかなわない。そういうことになっているはずだった。スバルを、のぞいては。

「転生をつかさどる獣たちは、輪廻の輪から解き放たれている。彼らの生き死にを握るのは、彼ら自身だ」

僧侶だったスバルの父が、そう言ったのをよく覚えている。

「人間は獣に逆らうことはできない。獣もいたずらに、人間を殺めることをしない。そうして我々は生きてきた。獣に生かされてきたんだ」

頭の中によみがえる父の言葉に、スバルは唾を吐きかけた。何が生かされてきただ。ならなぜ、ポーラは死んだ。やつらに――いや、やつに、殺されたからじゃないか。

走るうちに、浅い川の流れているところに出た。一足飛びに川を越えて、スバルは獣の一団に向き直る。森の獣だ。猪突が武器の獣には戦いにくかろうという判断だった。決して、スバルにとっても戦いやすい場所ではなかったが。

「セイッ！」

暗がりから飛び出してきた獣をかわしつつ、逆手に掴んだ短剣の刃を眉間に宛てる。鼻先がスバルの胴をかすめた。だが、無力化することに成功した。獣は、頭から血を、口から涎を垂らして、うつぶせ気味に倒れ伏す。その視線はやはりスバルに向いていたが、先ほどまでの殺気のこもった目線とは全然違った、何かを訴えかけるような目をしていた。

スバルはすぐに向き直り、戦闘態勢に復帰する。だが、森の暗闇からは、それ以上、神の獣たちが現れることはなかった。

すぐに、はっとした。ケントだ。彼が危ない。彼は、獣を狩る道具を持っていない。

「ちくしょう……こいつは詰み、かもな……」

ケントは、傾きかけた木の上で一人ごちていた。ゆさゆさと、彼のいる木が揺らされているのは、先ほどから獣が突進を繰り返しているからだ。

認識が甘かったと言わざるを得ない。いくら神の獣といえど、傷を与えられないまでもスバルが落ち着いて一匹ずつ駆除するための、時間稼ぎくらいにはなれると思っていた。これまでも、そうしてきた。

だが、この神の森にいる獣たちは想像以上に賢かった。やつらはスバルではなく、真っ先にケントに襲いかかってきたのだ。樹上から槍でつついても、矢を射っても、獣の身体ははじいてしまう。ケントはやつらをどうにかする手段は持っていなかった。

先ほど受けた傷が痛んだ。ケントは顔をしかめる。

「むこうも必死、ってことなのかね。だったらいいんだが」

これまでは、ただの無謀な連中が、戯れに獣を殺して回っているとしか思っていなかったのかもしれない。それが、神獣の本拠地にまで乗り込んできたのだ。むこうも本気を出してしかるべきということだろう。

木が、また大きく揺れる。暫時揺れが収まってからの不意打ちだったためふんばり切れず、ケントの脚が滑った。身体の重心が急激に移動するのがわかる。ケントは死を悟った。

とっさに伸ばした肘が、枝に引っかかってくれた。右肘を支えにして枝にぶら下がる形になり、落下することは免れたが、はずみで槍を落としてしまった。これでは飛び降りて逃げ出そうにも、槍先で牽制して距離をとるわけにもいかない。焦りが思考を鈍らせる。どうすれば生き延びられるかを経験から索引するとでも言うのか、様々な記憶が瞬間的に彼の頭を巡った。ケントは、これが走馬燈というやつか、と思った。だがすぐに、彼の処世策は、必要がなくなった。

枝の付け根が樹皮ごとずるり、と幹からはがれた。そのままケントの身体が、地平へ接近する。すんで腹筋を駆使し身体をエビのように丸めようとしたが、遅かった。とびかかった獣に右のふくらはぎにかみつかれ、枝をつかんだ手が離れた。受け身を取りながら背中ごと地面に落ち、身体を丸めて転がりでようとしたときにはもう遅い。その腹と腕も、控えていた別の獣の餌食となった。

薄れゆく意識の中で、ケントは思った。

神に挑むなんて、馬鹿のやることだ。あいつみたいな。

スバルが駆け付けたのは、そのときだった。

「やめろ！」

叫んだときにはすでに遅かった。スバルの目前で、ケントの喉笛がかみ切られた。勢いよく噴出する血で、獣はむさぼるように喉を潤す。獣はスバルにははなから興味がないとでも言うように、彼には目もくれずケントの血肉をむさぼり続けた。ケントだったもの。絶命したその肌に牙が突き立てられ、肉が、骨が刻み砕かれていくのを、スバルは茫然と見守ることしかできなかった。

やがて、獣たちの食事が終わると、一匹が肩越しにスバルの方を見た。振り返った獣が鼻を鳴らす様が見えた。獣がスバルを「お前が手を出せないのはもう知っているぞ」と嘲笑っているような気がした。

そのとき、山の稜線から顔を出した朝日が、スバルたちを照らし始めた。木の下にできた血だまりが日差しを跳ね返し、ケントだった名残が輝き始めた。

獣たちはスバルに襲いかかってはこなかった。何か魂胆があるかのように、ケントを殺したその場所で、スバルをただじっと眺めていた。

それからどれだけそうしていただろう。ふいにミチッ、ミチという音が、スバルの耳に入る。一匹の獣の尻から、練り物状の物体がひりだされていた。排泄。食事が終わり、不要物を押し出すその行為をスバルは食い入るように見ていた。目が離せなかった。

肌色がかった糞は、日に照らされながら、少し光っているように見えたかと思うと、うねうねと蠕動し始めた。まるで何者かが見えない手で、糞をこねているように見える。この糞はやがて、人間の形を――赤ん坊の姿を獲得し、産声を上げることだろう。スバルも、ほかの命も、そうしてこの世に産み落とされてきた。

転生の獣は文字通り、人間を転生させる一種の器官だ。絶命した人間は獣に食らわれることで神獣のもとへ還り、新たな生を受ける。その手段こそが、排泄だった。獣の尻から出た糞が外気にさらされながらうねうねと蠕動を繰り返すことで、人間の形となり、命を授かる。

この世界のそこかしこにある、獣の巣くう森の近くに住む者たちは、たびたび森に足を踏み入れ新たな命を持って帰る。ケント――いや、ケントの来世もおそらくはそうして彼らの手にゆだねられるだろう。もはや、スバルが彼にしてやれることは、何もなかった。

獣が排泄を終え、ゆっくりとどこかへ歩き始めたとき、スバルは初めて涙を流した。ケントは、いなくなった。この世界から彼が消えることによって、この世界に、どんな影響があるのだろうか。

ポーラ。スバルの妹が死んでからも世界は変わりなく営みを続けていた。だが、スバルの世界は激変した。同じように、彼の死によって、この世界の誰かの世界が、変わったりするのだろうか。

わからない。スバルには。だから新たな彼が、幸福な家庭のもとへ届けられることを願うのみだった。

＜＜＜

人待ちをしているときは、益体のないことばかり考えてしまう。いい天気の日だった。私はベンチに腰かけながら、少年野球の練習試合をぼんやりと眺めていた。

こんな風に思うことがある。今、目の前で野球をしている子供たち。次の瞬間に、この子たちの内の一人が突然この場から消えうせたとしたら。神隠しか何かではない。最初からいなかったものとして、その痕跡がすべて消失したとしたら、今見ている光景はどう変わるのだろう。

例えばサードを守っているあの太っちょの男の子。きっと